

# 日本語の「Vに行く」の 統語構造と意味構造に関する一考察\*

新井 文人

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

bunpyonn[at]gmail.com

---

## An Analysis of Syntax and Semantics of V-*ni ik* ‘V-for go’ in Japanese

Fumihito Arai

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women’s University

### Abstract

本研究は、日本語の移動動詞「行く」等が係わる複雑述語「Vに行く」の統語構造と意味構造に関する形式的分析である。本稿では、同形式における「に」の統語範疇と意味構造、Vとして意図的な動作・行為を表す動詞のみ生起可能である理由、また、移動動詞のみが同形式のような「目的」を表す「V<sub>1</sub>にV<sub>2</sub>」という複雑述語のV<sub>2</sub>として生起する理由の3点について、生成語彙意味論の枠組み (Pustejovsky 1995; 影山 2005; Hidaka 2012 等) を利用して、形式的な説明を与える。本研究では、同形式における「に」を補文標識と捉え、「に」の意味構造内に、ACTあるいはACT-ONという語彙概念構造を持つ動詞を要求するというVに対する選択制限を設け、上述の問題を説明する。

Within the framework of Generative Lexicon (Pustejovsky 1995), this paper presents a syntactic and semantic analysis of the purposive complex motion predicate V-*ni ik* ‘V-for go’ in Japanese with an eye to elucidating i) the category and role of *ni* connecting V and *ik* ‘go’, ii) the reason why an action verb alone can occur as V while an unaccusative verb cannot, and iii) the reason why a motion verb such as *ik* ‘go’ and *ku* ‘come’ can occur as the second verb of the complex predicate in question, whereas other types of verbs such as an action verb (e.g., *tabe* ‘eat’,

---

\*本稿の執筆にあたり、神戸松蔭女子学院大学大学院で開講されている「言語科学研究演習Ⅲ」において発表した際、郡司隆男氏と板東美智子氏をはじめ、皆様から有益なコメントを頂戴した。また、統語構造の議論に関し、西垣内泰介氏より有益なコメントを頂戴した。心より御礼申し上げる。

*manab* ‘study’, etc.) cannot. This study argues that *ni* is a complementizer in syntax, and that a selectional restriction in *ni*’s semantics licenses an action verb but prohibits an unaccusative verb as V in the complex predicate.

キーワード: 「V に行く」、補文標識、生成語彙意味論、語彙概念構造、V の選択制限

**Key Words:** *V-ni ik* ‘V-for go’, complementizer, Generative Lexicon Theory, Lexical Conceptual Structure, selectional restriction on V

## 1. 本研究の目的と目標

本研究は、日本語の移動動詞が関与する「動詞 (V) の連用形 (マス形のみ) + に + 移動動詞」(以下、V ニイクと称す) という複雑述語に関する生成語彙意味論 (Generative Lexicon Theory) の枠組みを利用した分析である。V ニイクでは、移動動詞が本動詞として「移動」を表し、「V + に」が「移動の目的」を表す (Iida 1987; Miyagawa 1987; Tsujimura 1992; 影山 1993; 他)。<sup>1</sup> 例えば、(1a-c) はそれぞれ「映画を見るために行った」「彼に会うために来た」「傘を取るために帰った」と解釈される。

- (1) a. 映画を 見 に行った。 (荘司 1997: 47, (24))
- b. 彼に 会 に来た。 (荘司 1997: 47, (25))
- c. 傘を 取 りに帰った。 (荘司 1997: 47, (26))

V ニイクに関する先行研究では、動作動詞であれば例外なく V として生起できる (荘司 1997: 47) 等の性質や意味合成のプロセスが記述的・理論的観点から議論されてきた (Iida 1987; Miyagawa 1987; Tsujimura 1992; 影山 1993; Manning 1993; Matsumoto 1996; 荘司 1997; 吉永 2010 等)。しかし、同形式に関しては (2a-c) のような点から更なる考察が求められる。

- (2) a. V と移動動詞を繋ぐ「に」の統語範疇と意味合成プロセスにおける機能
- b. V に係る選択制限 (なぜ、動作・行為動詞以外の動詞が V として生起しにくいのか)
- c. V ニイクのような「目的」を表す「V<sub>1</sub>に V<sub>2</sub>」の V<sub>2</sub>に係る生起制限 (なぜ、「行く」「来る」等の移動を表す動詞のみが V<sub>2</sub>として生起するのか)

<sup>1</sup>V ニイクの V の位置には単純和語動詞の連用形のほか動名詞も生起するとされるが、本研究では前者のみを扱う。また、一部、必ずしも「～するために移動する」ことを表さず語彙化した意味を表す (ia-d) のような例も見られるが、本稿では扱わない ((ia-d) では、「>」の右側が語彙化した意味である)。

- (i) a. 遊びに行く: 「遊ぶために行く」 > 「(誰かの家に) 立ち寄る」 (Matsumoto 1996: 261, (40))
- b. 勝ちに行く: 「(試合などに) 勝つために行く」 > 「勝つことを目標に試合に臨む」  
引き分けではなく、世界 3 位 (南アフリカ) に勝ちに行った  
(TBS 「ひるおび!」番組内フリップのタイトル、2015/10/14)
- c. 置きに行く: 「(何かをある場所に) 置くために行く」 >  
「チャレンジすることを恐れて無難な手段を取る」
- d. 買いに走る: 「(何かを) 買うために走る」 > 「(何かを) 買うために急ぐ」

本研究では、生成語彙意味論の枠組み (Pustejovsky 1995; 影山 2005; Hidaka 2012 等) を利用して V ニイクの統語構造と意味構造を分析し、上述の点を理論的に説明することを目指す。2 節では、Matsumoto (1996) を中心に先行研究を振り返り、問題点の所在を述べる。3 節では V ニイクの統語構造を、4 節では「に」の意味構造と V ニイクの意味合成プロセスを考察する。最後に、結論と今後の課題を述べる (5 節)。

## 2. 先行研究と問題点の所在

従来、V ニイクの性質に関し、i) V は連用形（マス形）を取り、ii) 動作動詞であれば例外なく V として生起し、iii) 移動動詞としては主に「行く」「来る」「帰る」「いらっしゃる」が生起する (Matsumoto 1996; 荘司 1997) と言われる。統語的には、同形式では再構築 (restructuring) が起こること (Miyagawa 1987) や「V ニ」の主要部移動がないこと (Sugimura 2010) が指摘されている。他方、同形式内の「に」は補文標識 (荘司 1997, 2012) あるいは後置詞 (吉永 2010) とみられている。以下では、語彙機能文法の枠組みで V ニイクの意味構造を分析した Matsumoto (1996) を再検討し、問題点の所在を明確にする。

### 2.1 Matsumoto (1996)

Matsumoto (1996: ch. 9) は、V ニイクを構成素構造 (c-structure) では 2 語、文法機能構造 (f-structure) と項構造 (a-structure) では 1 語と捉えている。V ニイクの意味構造に関する Matsumoto (1996) の分析は、移動動詞には移動の事実と移動の関連要素（移動様態、経路位置関係、移動の目的等）が包入（語彙化）されているという Talmy (1985) に基づく。日本語の移動動詞の場合、単純動詞では移動の事実とともに、「行く」や「来る」等には方向性が、「越える」や「渡る」等には経路位置関係が、「歩く」や「走る」等には移動様態が 1 つの動詞に包入されると考えられている (宮島 1984; Matsumoto 1996; 松本 1997)。複雑述語では、移動の事実と移動の関連要素が複雑述語を構成する異なる動詞によって表され、1 つの複雑述語の意味として包入される (Matsumoto 1996: 267)。この考えの下、Matsumoto (1996: 276) は、V ニイクには移動の事実と移動の目的が包入されると分析し、「ジョンは図書館に本を読みに行く」は (3) のような意味構造を持つと提案している。

(3)	REL	‘GO’ <FIGURE, PATH>		
	FIGURE	[ REL ‘John’ ]		
	PATH	...		
	TIME	$I_{i,j}$		
		REL	‘INTEND’ <INTENDER, INTENDED>	
		TIME		
		INTENDER		
	MANNER		REL	‘ACT’ <ACTOR, ACTED-UPON>
			ACTOR	
		INTENDED	ACTED-UPON	[ REL ‘book’ ]
			MANNER	...
			TIME	$P_j$

(Matsumoto 1996: 286, (37b))

Matsumoto (1996) の示す語彙化制約 (pp. 268–269, (7)) によれば、V ニイクでは、移動の事実 (GO) と移動の目的 (INTEND) の包入が共通の時間値 ( $I_{i,j}$ ) により認可され、移動行為と移動主体がある動作を行う目的や意図を持つということが時間的に共拡張 (coextensive) される。その結果、移動の事実と移動の目的が包入 (語彙化) されて V ニイクの意味が成立する。また、INTENDED が取る「(本を) 読む」を表す ACT と GO や INTEND との包入は、INTEND と ACT の間の時間関係に関係なく INTENDED の項が透明 (transparent) になることで成立すると分析されている (Matsumoto 1996: 286)。

## 2.2 問題点の所在

(3) に示した Matsumoto (1996) 分析には曖昧性が潜む。それは、V ニイクを—例えば、「V ていく」から—弁別する「移動の目的」という意味が、i) 「行く」自体が移動の関連要素として移動の事実とともに包入するのか、それとも、ii) 「移動の目的」が V と「行く」の間に介在する「に」から意味合成の過程で取り入れられて V ニイクの意味を成立させるのか、という点での曖昧性である。仮に、前者であるとする、「移動の目的」ではなく、「継起的移動」や「継続」等を表す「V ていく」を構成する「行く」とは別の語彙素として V ニイクに生起する「行く」を想定する必要がある。<sup>2</sup>

一方、「行く」の語彙素は 1 つで、直示性に加えて「移動の目的」を包入していると仮定すると、「行く」が関与する V ニイクと「V ていく」という複雑述語の意味合成において、どのように移動の関連要素が選択されて述語全体の意味が成立するのかを説明する必要が生じる。構成性の原理に鑑みると、V ニイク全体の意味は V、「に」、「行く」とい

<sup>2</sup>移動表現について通言語的に見られる文法化の方向性 (SPACE > INTENTION > FUTURE) (Bybee, Pagliuca, & Perkins 1991) に照らせば、「移動の目的」が「行く」に語彙的に包入されているとしても「V ていく」が文法化して「継続」等のアスペクトの意味を表すという事実もこの方向性に沿う形で説明されるのかもしれない。また、「目的」という意味が意味合成の過程において「行く」と「に」の間で照合されて V ニイクの意味が成立すると考えれば、「行く」の語彙素は 1 つで、V ニイクと「V ていく」の意味合成の際に別々の移動関連要素が選択されるとすればよいのかもしれない。

う3要素から合成されると考える方が妥当である。このことから、「移動の目的」が「に」から取り入れられるという仮説の下、V ニイクの意味合成を改めて検討する余地がある。

V ニイクの意味構造を考えるうえで、同形式に生起する「に」の範疇と意味合成における機能を考える必要がある。「に」の範疇は、統語論的研究 (Miyagawa 1987; Sugimura 2010) では特段触れておらず、Matsumoto (1996) の分析でも、構成素構造 (c-structure) において「に」は V に付属すると見られるが、その位置づけは明らかでない (p. 256, (32b))。他方、補文標識 (荘司 1997, 2012) あるいは後置詞 (吉永 2010) と見る研究もあり、同形式に生起する「に」の範疇とその機能は一考を要す課題である。

上述の点に加え、V ニイクに係る2つの選択制限 (あるいは生起制限) に関する説明も求められる。1つは、V に係る選択制限である。荘司 (1997) の観察の通り、動作動詞は V として例外なく生起する ((本を) 買いに行く、(ランチを) 食べに行く、(歌を) 歌いに来る、等) が、管見の限り、先行研究では動作動詞以外が V として生起できない理由が説明されていない。

もう1つは、「V<sub>1</sub>ために V<sub>2</sub>」との比較から浮かび上がる V ニイク形式の後項動詞に係る生起制限である。V ニイクの場合、後項動詞としては「行く」「来る」「帰る」「いらっしゃる」が多いようである (Matsumoto 1996; 荘司 1997) が、(4a-g) のように、様々な移動動詞が後項動詞として生起し得る。<sup>3</sup>

- (4) a. 出発の日までの一か月、進に 会いに行けなかった のも  
(泉啓子 (1997) 『サイレントビート』)
- b. メンバーとも仲良くなり、事務所に 遊びに来る そうです。  
(Yahoo! ブログ (2008))
- c. お金が足りなくて家に 取りに帰った などなど、  
(山崎洋一郎 (2005) 『激刊! 山崎』)
- d. まずスポーツ用品店に靴を 買いに走る  
(伊藤幸司 (1998) 『がんばらない山歩き』)
- e. 室内はともかく、外を歩き回るのに (お菓子を もらいに歩きます)  
(Yahoo! 知恵袋 (2005))
- f. 移動塔は今日の竣工式に合わせて整備され、誰でも 見に上がる ことができるようになりました。  
(<http://damnet.or.jp/cgi-bin/binranB/TPage.cgi?id=588>, 2015/10/30)
- g. 子ども達の様子を 見に降りる と、お母さんが一人だけご覧になられていました。  
(<http://www.keiai.ac.jp/topmenu/koborebanashi.htm>, 2015/10/30)

他方、V ニイクは「V するために移動する」と解釈される点で、意味的に「V<sub>1</sub>ために V<sub>2</sub>」という形式に似ている。「V<sub>1</sub>ために V<sub>2</sub>」という形式の場合、(5) に示すように、移動

<sup>3</sup>(4a-e) は「少納言」を利用した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』からの引用で、(4f, g) は、『日本語文法事典』(p. 26) に挙げられていた移動動詞の例をもとに、それぞれ「見に上がる」「見に降りる」で Web 検索をして引用した例である。

動詞に限らず、様々な動詞が  $V_2$  として生起する。しかし、V ニイクのような「目的」を表す「 $V_1$ に  $V_2$ 」の  $V_2$  として移動動詞以外が生起すると（少なくとも現代日本語では）容認度が下がる。

- (5) (図書館に) 文献を探すために行く、(喫茶店に) コーヒーを飲むために行く、(食堂に) 昼ご飯を食べるために来る、体を温めるために動く、教師になるために学ぶ、汚れを取るために(床を) 拭く、疲れを取るために寝る、新刊の文庫本を読むために買う、等
- (6) (図書館に) 文献を探しに行く、(喫茶店に) コーヒーを飲みに行く、(食堂に) 昼ご飯を食べに来る、?体を温めに動く、?教師になり学ぶ、?汚れを取りに(床を) 拭く、?疲れを取りに寝る、?新刊の文庫本を読みに行く、等

このように、「 $V_1$ ために  $V_2$ 」と「 $V_1$ に  $V_2$ 」は共に「目的」を表すにも係わらず、後者では  $V_2$  に関してより強い生起制限が掛かる。その理由の説明も求められる。

V ニイクに関する先行研究に残る上述のような課題を踏まえ、本研究では Nishigauchi (2014) で提案された視点投射に関する理論的枠組みや生成語彙意味論の枠組み (Pustejovsky 1995; 影山 2005; Hidaka 2012 等) を利用して同形式の統語構造と意味構造を考察し、(2a-c) に挙げた 3 点について理論的な説明を与えることを目指す。

### 3. V ニイクの統語構造

V ニイクの統語構造の分析にあたり、同形式に生起する「に」に先行する要素の性質と「に」自体の統語範疇を明らかにする必要がある。従来、「に」の先行要素としては、動詞の連用形か動名詞の 2 つの可能性が指摘され (Iida 1987; Tsujimura 1992; 影山 1993; Manning 1993; 荘司 1997)、同形式に生起する「に」は、補文標識 (荘司 1997, 2012) あるいは後置詞 (吉永 2010) であると分析されてきた。

本研究では、「に」の先行要素について、単純和語動詞が生起する場合は動名詞ではなく動詞の連用形であるとし、i) サ変動詞化、ii) 用途を表す「～用」との結合、iii) 「に」以外の格標示の認可、iv) アクセント、v) 主語と目的語の格標示という観点から、これを確認する (注 1 も参照)。「に」の統語範疇について、V ニイクに生起する「に」は補文標識 (Complementizer) であると主張する。

はじめに、V ニイクの先行要素 (V) が、単純和語動詞の場合、その連用形であることを確認する。一般に、動名詞は (7a, b) のように、サ変動詞化や用途を表す「～用」との結合が可能である (影山 1993)。しかし、(8a, b) のように、V ニイクの V についてはいずれも容認されないため、同形式の V は動詞の連用形である。

- (7) a. ゴミ出しする、雪掻きする、芋掘りする  
b. ゴミ出し用、雪掻き用、芋掘り用
- (8) a. \*ゴミを出しする、\*雪を掻きする、\*芋を掘りする  
b. \*ゴミを出し用、\*雪を掻き用、\*芋を掘り用

また、動名詞は (9a) のように、「に」の他に主格を表す「が」や対格を表す「を」による格標示を受けて主語や目的語として生起できる。一方、(9b) のように、V ニイクの V はガ格やヲ格標示を受け、主語や目的語になることはない (小林 2004)。

- (9) a. ゴミ出しが大変だ、雪掻きを始めた、芋掘りを始めた  
b. \*ゴミを出しが大変だ、\*雪を掻きを始めた、\*芋を掘りを始めた

アクセントの違いからも V ニイクの V が動詞の連用形であることがわかる。アクセントを持つ単純和語動詞の場合、連用形では語尾から 2 番目のモーラに、動名詞では最終モーラにアクセントが置かれる (Tsuji-mura 1992: 481, fn. 7)。東京方言の場合、(10) と (11a) に示すように、V ニイクの V は連用形のアクセントパターンで発音される。(11b) に示す動名詞のアクセントパターンと比べられたい。

- (10) 海へ泳ぎに行く (およぎに / \*およぎに)、  
会議の内容を話に行く (はなしに / \*はなしに)  
(11) a. ゴミをだしに、ゆきをかきに、いもをほりに  
b. ゴミだしに、ゆきかきに、いもほりに

最後に、主語と目的語に対する格標示の違いからも、V ニイクの V は動名詞ではなく、動詞の連用形であるとみられる。動名詞の場合、時を表す語 (～後、～中、～前) を伴う場合を除き、(12a) に示すように、その主語は主格「が」ではなく属格「の」で標示され、目的語は対格「を」による格標示を受けない (Tsuji-mura 1992; Manning 1993)。しかし、V ニイクの場合、(12b) のように、V の主語は属格「の」ではなく主格「が」で、目的語は対格「を」で標示されるため、動名詞とは考えにくい。<sup>4</sup>

- (12) a. 太郎 { \*が / の } ゴミ { \*を /  $\phi$  } 出し、太郎 { \*が / の } 雪 { \*を /  $\phi$  } 掻き  
b. 太郎 { が / \*の } ゴミ { を / \* $\phi$  } 出しに行った、太郎 { が / \*の } 雪 { を / \* $\phi$  } 掻きに行った

このように、V ニイクの V は動名詞と異なり、動詞的振る舞いを見せることから、本研究では、同形式の V は動詞の連用形であると考え。また、動詞の連用形が来る「に」に先行する部分の統語構造に関し、本研究では英語の to 不定詞 (*to*-infinitive) が時制要素を持つという議論 (Stowell 1982 等) を援用し、空の時制辞 (null T) を主要部とする TP の補部を動詞の連用形 ( $V_{infinitive}$ ) を主要部とする VP が占めると想定する。この見方は (13a) が (13b) のような統語構造を持つとすると妥当であると考え。

- (13) a. 太郎が種をまき、花子が水をまいた。  
b. [<sub>TP</sub> 太郎が [<sub>VP</sub> 種をまき] [<sub>T</sub> e]], [<sub>TP</sub> 花子が [<sub>VP</sub> 水をまい] [<sub>T</sub> た]]。

<sup>4</sup>V ニイクにおける格標示に関しては、「に」が時間ないしアスペクトに関する性質 ([+Asp(ectual)]) を持つと想定して、それが、V が主文述語の場合と同じように、主格と対格標示を認可するという見方もある (Tida 1987; Tsuji-mura 1992: fn. 2)。

(13a) のような等位接続文の場合、後項の主語「花子」のガ格標示が過去の時制辞「た」との EPP (Extended Projection Principle) 素性の照合によって行われるのと同様に、前項の主語「太郎」のガ格標示は空の時制辞 ( $[_{Te}]$ ) との EPP 素性の照合によって実現されると想定する。つまり、本研究では、顕在的に生起する時制辞「る／た」が主語を認可するように、動詞の連用形の主語の認可は空の時制辞により行われると捉える。このような想定の下、本研究では動詞の連用形が生起する V ニイクの V は空の時制辞を主要部とする TP の補部を成すと考ええる。

そして、「に」に先行する部分が TP であることを踏まえ、本研究は V ニイクに生起する「に」を補文標識 (Complementizer) と見なす。この見方は、(14a-e) に示すように、補文標識「と」に導かれる埋め込み文と主文述語の間に語句が挿入可能であるのと同様に、V ニイクの「に」と移動動詞の間に語句が挿入できるという両者の類似性から裏づけられる (莊司 1997)。

- (14) a. 太郎が次郎に会ったと 昨日 言った。  
 b. 首相がその貿易協定は日本にとって大きな意義があると 委員会で述べた。  
 c. ニュース番組が 2020 年に東京での五輪開催が決定したと 速報で伝えた。  
 d. 太郎が次郎に会いに 神戸へ行った。  
 e. 太郎が本を借りに 図書館へ行った。

ここまでの議論で、V ニイクの統語構造の中核的な部分—V の形態的な性質と「に」の統語範疇—が明らかになった。同形式の統語構造を記述するうえで、もう 1 つ考慮すべき点は同形式の後項に「行く」「来る」のような直示性を持つ移動動詞が生起しやすいことである。従来、「行く」「来る」のような直示的表現の解釈には「視点」が大きく関与し、話者がエンパシーを持つ文中に現れる人物 (Empathy Focus, EF) の視点から描写されると言われる (Kuno & Kaburaki 1977; Kuno 1987)。久野 (1978: pp. 253–254) によれば、「来る」は話者が (移動の主体以外の) 到達点側の人により強いエンパシーを持つ場合 (E(到達点側の人) > E(移動の主体、出発点側の人)) に、「行く」はそれ以外の場合 (E(移動の主体、出発点側の人) > E(到達点側の人)) に用いられる。直示的移動動詞が関与する V ニイクの統語構造を考えるうえでは、このような「視点」の考え方を反映させる必要がある。

本研究では、Nishigauchi (2014) に基づき、V ニイクに生起する「行く」「来る」に代表される直示的移動動詞は Deixis Phrase (DeixP) の主要部を占め、指定部はこれらの動詞の視点保持者が来る構造を持つと考える。「行く」では主語 (= 移動の主体) が、「来る」では (移動の主体以外の) 到達点側の人が視点保持者となるため、(15a, b) に示すように、それぞれの投射の指定部は「行く」の場合は主語が、「来る」の場合は *pro* が占める (西垣内 p.c.)。

- (15) a.  $[_{DeixP} \text{pro}_i$  [花子が自分<sub>i</sub>を訪ねて] 来た] とき、太郎<sub>i</sub>は本を読んでいた。  
 b.  $*[_{DeixP}$  花子が [自分<sub>i</sub>を訪ねて] 行った] とき、太郎<sub>i</sub>は本を読んでいた。

(西垣内 p.c.)



上述の考察に基づき、本研究では V ニイクの統語構造として (16) を提案する。例えば、(17a) の統語構造は (17b) のように表される。

(16)  $[_{\text{DeixP}} \text{NP}_i [_{\text{CP}} [_{\text{TP}} \text{PRO}_i [_{\text{VP}} V_{\text{infinitive}}] [_{\text{T}} e]] \text{ni}] \text{ik}]$

(17) a. 太郎が本を読みに行った。

b.  $[_{\text{DeixP}} \text{太郎}_i \text{が} [_{\text{CP}} [_{\text{TP}} \text{PRO}_i [_{\text{VP}} \text{本を読み}] [_{\text{T}} e]]] \text{に}] \text{行った}]$ 。

(17a) の場合、「本を読む」という行為の主体と「行く」という移動の主体は同じ「太郎」でなければならない (\*太郎が次郎が本を読みに行った)。その一方で、V の主語は統語的に顕在化すると不自然である (?\*太郎<sub>i</sub>が太郎<sub>i</sub>が本を読みに行った)。そのため、「に」を主要部とする CP の補部にあたる TP の指定部は PRO とし、(17b) では「行く」の投射 (DeixP) の指定部を占める主語「太郎」と同一の指標を付すことで、VP の表す行為と「行く」の表す移動の主体が同一人物であることを表している。

このような V ニイクの V の指定部 PRO が「行く」の主語からコントロールを受けるという分析の証左として、Nakatani (2013) によるテ形複雑述語 ( $V_1\text{-te-}V_2$ ) の統語構造についての議論を援用する。Nakatani (2013) は、(18a) のように  $V_2$  が本動詞の意味を表す場合は  $V_1$  の主語を PRO と分析することが、(18b) のようにアスペクトの意味を表す場合は  $V_1$  から  $V_2$  への主語上昇と分析することが妥当であると考えている。

(18) a.  $[_{\text{TP}} \text{太郎}_i \text{が} [_{\text{PRO}_i} \text{歩いて}] \text{行った}]$ 。

b.  $[_{\text{TP}} \text{花が} [_{\text{t}} \text{枯れて}] \text{いった}]$ 。

V ニイクの場合、V として非対格動詞は生起せず、動作や行為を表す動詞のみ生起できる。また、 $V_2$  にあたる移動動詞は本動詞の意味である「移動」を表す。このように、V ニイクの V として生起可能な動詞の性質と  $V_2$  にあたる移動動詞の表す意味を踏まえると、V ニイクは、V の主語 (PRO) が「行く」の主語にコントロールされる (16) のような統語構造を持つとする見方は妥当なものと考える。

本節では、先行研究に残る問題点の 1 つである「に」の統語範疇の検討を中心に、V ニイクの統語構造を考察してきた。本節に示した分析により、従来、曖昧にされていた同形式に生起する「に」の統語的位置づけを明確にできたものとする。次節では、意味論的観点から、「に」の意味構造と V ニイクの意味合成プロセスを考察する。

#### 4. V ニイクに生起する「に」と V ニイクの意味構造

本研究では、V ニイクに生起する「に」が (16) に示すように TP を補部にとること、同形式の V には動作動詞しか生起しないこと (荘司 1997) に基づき、V ニイクを構成する「に」の意味構造を (19) のように想定する。<sup>5</sup> CONST にある語彙概念構造 ( $\{\text{ACT}(x) / \text{ACT-ON}(x, y)\}$ ) は、動作動詞しか V ニイクの V として生起しないという先行研究の

<sup>5</sup>クオリア構造を真理条件の意味を表す Truth-conditional Section (TS) と非真理条件の含意を表す Non-truth-conditional Section (NTS) とに分ける方式は Hidaka (2012) に従う。意味構造の中で議論に関係しないクオリアは省略する。

観察 (荘司 1997) に基づき、「に」が補部として取る TP 内に ACT 型の動作動詞あるいは ACT-ON 型の行為動詞が生起することを指定する V に対する選択制限である。これらの動詞は意図的な動作・行為を表し、その主語は有生物に限られるため、ARG1 でこれを規定している。また、ARG2 は行為動詞が生起する場合のみ表出されることを表すために丸括弧で括ってある。

$$(19) \left[ \begin{array}{l} ni \\ ARG = \left[ \begin{array}{l} ARG1: TP \left[ \begin{array}{l} ARG1: x_{[+animate]} (, ARG2: y) \end{array} \right] \end{array} \right] \\ QUALIA = \left[ \begin{array}{l} Truth\text{-}conditional\ Section\ (TS) \\ FORMAL: \phi \\ CONST: \left\{ ACT(x) / ACT\text{-}ON(x, y) \right\} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(19) のような意味構造を想定することで、V ニイクでは V として主語の意図的な動作・行為を表す動詞以外が生起できないという V に関する選択制限が説明できる。意図的な動作・行為を表す動詞の場合、その語彙概念構造 (ACT/ACT-ON) が「に」の CONST にある値と符合し、V ニイクとして適切に認可される。しかし、このような語彙概念構造を持たない非対格動詞の場合は値が符合せずに意味合成が成立しないため、V ニイクとして容認されない (\* (電燈が) 消えに行く、\* (花が) 枯れに行く)。

ただし、普通、非対格動詞に分類される動詞の中にも「死ぬ」や「感じる」のように V ニイクに生起するものがある (これから死にに行く、原宿に若者の空気を感じに行く)。その場合、通常の非対格動詞の解釈と異なり、「死ぬ」であれば「自殺する」のような意図的な行為として解釈される (つまり、ACT-ON (x, x) のような語彙概念構造を持つと考えられる) ため、V ニイクに生起できるとみられる。「死ぬ」のように意図的な行為として解釈され得る動詞は V ニイクに生起可能であるが、そのような解釈を持ち得ない状態動詞 (居 (い) る等) や瞬間動詞 (着く等) は V ニイクに生起することはできない (\*太郎がそこに居 (い) に行く、\*太郎が公園に着きに行く)。これを踏まえ、本研究は、V ニイクに生起する「に」に関して、V に対する選択制限を持つ (19) のような意味構造を提案する。

次に、本研究の想定する V ニイクに生起する「行く」の意味構造を提示する。(16) で示した V ニイクの統語構造に基づき、本研究では、同形式の「行く」は (20) のような意味構造を持つと考える。意味構造に関し、本研究では、FORMAL 値に語の時間的特性 (Igarashi & Gunji 1998; 郡司 2004)、距離関数 (distance function; **DIS**)、視点関数 (point-of-view function; **POV**) を導入する (Arai 2014)。

$$\begin{array}{l}
 (20) \quad ik \\
 \left[ \begin{array}{l}
 \text{ARG} = \left[ \begin{array}{l}
 \text{ARG1: } x_i, \\
 \text{ARG2: CP} \left[ \text{TP} \left[ \text{ARG1: } i, (\text{ARG2: } y) \right] \right], \\
 \text{D-ARG: } z, \\
 \text{P-ARG: } p_i
 \end{array} \right] \\
 \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l}
 \text{Truth-conditional Section (TS)} \\
 \text{FORMAL: } \left[ \begin{array}{l}
 s < f, \\
 \text{DIS}(p, \text{Loc}(e, s')) < \text{DIS}(p, \text{Loc}(e, f)), \\
 \text{POV}(p) = \langle \text{POINT}(e) = \text{Loc}(e, s'), \\
 \text{VIEW}(y) = \langle s, f \rangle \rangle \\
 \text{CONST: GO}(x)
 \end{array} \right] \\
 \text{Non-truth-conditional Section (NTS)} \\
 \text{TELIC: BECOME-BE-AT}(x, z_{\text{place}})
 \end{array} \right]
 \end{array} \right]
 \end{array}$$

語の時間的特性とは、動詞の語彙素には行為開始時点 ( $s$ )、行為完了時点兼状態開始時点 ( $f$ )、状態終了時点 ( $r$ ) という3つの時点の組が定義されているという考え方である (郡司 2004)。継続性を表す時間表現との共起可能性 (彼はこの道を1時間行った) に基づき、「行く」は継続動詞的な語の時間的特性 ( $s < f$ ) を持つと考える。

距離関数と視点関数は、「行く」の直示性を形式的に捉えるための意味論的関数である (新井・日高 2013; Arai 2014)。このうち、距離関数 (**DIS**) は、動詞の表すイベントのある時点における対象と視点保持者 ( $p$ ) との間の空間的・心理的距離を表す。「行く」は  $\text{DIS}(p, \text{Loc}(e, s')) < \text{DIS}(p, \text{Loc}(e, f))$  という値を持つ。これは、視点保持者 ( $p$ ) とイベントが少し進んだ時点との距離 ( $\text{DIS}(p, \text{Loc}(e, s'))$ ) が、視点保持者 ( $p$ ) とイベントの終了時点との距離 ( $\text{DIS}(p, \text{Loc}(e, f))$ ) より近くなければならないという制約を表す。

視点関数 (**POV**) は視点保持者 ( $p$ ) がイベントをどのように捉えるかを表し、「動詞が表すイベントのどの範囲を視野に入れるのか」を表す **VIEW** (視野) と、その視野の中で「動詞が表すイベントのどの地点 (時点) 見るのか」を表わす **POINT** (地/時点) とで構成される。「行く」の場合、**POINT** の値が  $\text{POINT}(e) = \text{Loc}(e, s')$  と指定され、ある過程を含むイベントを変数に取り、イベントが少し進んだ時点  $\text{Loc}(e, s')$  を値として出力する。これは、視点保持者が、イベントが少し進んだ時点 (地点) における対象を見なければならないことを示す。一方、**VIEW** の値は  $\text{VIEW}(y) = \langle s, f \rangle$  と指定され、視点保持者 ( $p$ ) がイベント全体を視野に入れている必要があることを表す (新井・日高 2013)。端的に述べると、距離関数 (**DIS**) と視点関数 (**POV**) は「行く」の非話者指向性 (森田 1968, 1994) を形式的に捉える意味論的関数である。

項構造 (ARG) のうち、ARG1 ( $x_i$ ) は「行く」の主体を表す。ARG2 は、「行く」が「に」を主要部とする CP を補部にとることを表す。(16) で示したように、統語構造上は V ニイクの V は「行く」の主語と同一指標を持つ PRO と想定するので、意味構造において PRO にあたる TP 内の ARG1 には「行く」の主語との同一性を表す指標のみを規定する。また、V ニイクでは移動の着点 ( $z$ ) は必ずしも言語的に表出されなくてもよいが、移動に

は論理的に着点が含意されるため D-ARG (default argument) (Pustejovsky 1995) とする。これを踏まえ、(20) では到達の意味 (BECOME-BE-AT ( $x, z_{\text{place}}$ )) を非真理条件的含意である TELIC に指定する。<sup>6</sup> P-ARG:  $p_i$  は、FORMAL 値に導入する距離関数 (DIS) と視点関数 (POV) に関連づけられる視点保持者 (point-of-view holder;  $p$ ) を表す項である。(16) で示したように、「行く」の投射の視点保持者は主語であるため、 $p$  は主語 ( $x_i$ ) と同一となる。ゆえに、同一の指標を付してある。

では、「太郎が (図書館に) 本を読みに行く」を例に、V ニイクの意味合成を説明する。まず、V である「(本を) 読む」の意味構造を (21) のように想定する。

$$(21) \left[ \begin{array}{l} (\text{hon-o}) \text{ yom} \\ \text{ARG} = \left[ \begin{array}{l} \text{ARG1: } i, \text{ ARG2: } y \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \left[ \begin{array}{l} \text{Truth-conditional Section (TS)} \\ \text{FORMAL: } s < f \\ \text{CONST: } \text{ACT-ON (} i, y \text{)} \end{array} \right] \right] \end{array} \right]$$

「読む」は「1 時間」のような継続性を表す時間表現と共起できる (太郎は 1 時間本を読んだ) ため、行為開始時点 ( $s$ ) と行為終了時点 ( $f$ ) の間に時間的幅があるような語の時間的特性 ( $s < f$ ) を持つと考えられる。V ニイクの V の主語が統語構造では「行く」の主語と同一指標を持つ PRO で表されると想定するため、「読む」の主語を ARG1:  $i$  とする。ARG2:  $y$  が「読む」という行為の対象となる「本」である。

次に、(21) が (19) と合成した「(本を) 読みに」は (22) のような意味構造を持つと想定する。FORMAL には「読む」の時間的特性 ( $s < f$ ) が引き継がれる。また、「読む」が有生物の意図的な行為を表す ACT-ON 型の動詞のため、V ニイクに生起する「に」が持つ V に要求する語彙概念構造の値と符合し、意味合成が認可される。

$$(22) \left[ \begin{array}{l} (\text{hon-o}) \text{ yomi-ni} \\ \text{ARG} = \left[ \begin{array}{l} \text{ARG1: TP} \left[ \begin{array}{l} \text{ARG1: } i, \text{ ARG2: } y \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \left[ \begin{array}{l} \text{Truth-conditional Section (TS)} \\ \text{FORMAL: } s < f \\ \text{CONST: } \text{ACT-ON (} i, y \text{)} \end{array} \right] \right] \end{array} \right]$$

最後に、(22) と (20) が合成し、「太郎が (図書館に) 本を読みに行く」は (23) のような意味構造を持つと考える。

<sup>6</sup> 「ジョンは遊園地に行ったが、途中で交通事故に遭ったので、遊園地に着くことができなかった。」のように、「行く」の到達の意味は否定され得るので、「行く」はこの意味を非命題レベルに持つと考える (Nakatani (2013) も参照されたい)。

$$(23) \left[ \begin{array}{l} \text{(Taroo-ga (tosyokan-ni) hon-o) yomi-ni-ik} \\ \\ \text{ARG} = \left[ \begin{array}{l} \text{ARG1: } x_i, \\ \text{ARG2: CP} \left[ \text{TP} \left[ \text{ARG1: } i, \text{ARG2: } y \right] \right], \\ \text{D-ARG: } z, \\ \text{P-ARG: } p_i \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \text{Truth-conditional Section (TS)} \\ \\ \text{FORMAL:} \left[ \begin{array}{l} s_1 < f_1 < s_2 < f_2, \\ \text{DIS}(p, \text{Loc}(e, s')) < \text{DIS}(p, \text{Loc}(e, f)), \\ \text{POV}(p) = \langle \text{POINT}(e) = \text{Loc}(e, s'), \\ \text{VIEW}(y) = \langle s, f \rangle \rangle \end{array} \right] \\ \\ \text{CONST: GO}(x_i) \wedge \text{ACT-ON}(i, y) \\ \\ \text{Non-truth-conditional Section (NTS)} \\ \\ \text{TELIC: BECOME-BE-AT}(x_i, z) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

項構造において、ARG1:  $x_i$  が「行く」の表す移動の主体である「太郎」、D-ARG:  $z$  は非真理条件的含意である着点（図書館）に対応する。「読みに行く」に参与する「（本を）読む」と「（図書館に）行く」が表す2つのイベントの時間関係は継起的である（（図書館に）行ってから本を読む）ことから、このイベントの継起性を反映して、FORMAL 内の「読みに行く」の語の時間的特性を  $s_1 < f_1 < s_2 < f_2$  のように指定している（23）では「行く」の語の時間的特性を  $s_1 < f_1$  で、「読む」のそれを  $s_2 < f_2$  で示している）。

V ニイクに関し、このような意味合成プロセスを想定することで、2.2 節で指摘した先行研究に残る課題は解決される。まず、「行く」が移動の関連要素として「移動の目的」を語彙的に包入するのかどうかについて曖昧性の残る Matsumoto (1996) に対し、本研究では「行く」はあくまで直示性を持つ「移動の事実」のみを表し、「移動の目的」は V ニイクに現れる「に」によって表されると考える。これにより、「移動の目的」を表さない「V ていく」の意味合成との整合性も保たれる。また、V ニイクには主語の意図的な動作・行為を表す動詞しか生起し得ないという V に対する選択制限は、(19) に示したように、「に」の CONST に、ACT あるいは ACT-ON という語彙概念構造を持つ動詞のみを選択するという選択制限を指定することで説明できる。

V ニイクのような「目的」を表す「V<sub>1</sub>にV<sub>2</sub>」形式の V<sub>2</sub> に係る生起制限に関し、本研究では、移動動詞はその意味構造において、FORMAL 内にその動詞が表すイベントの時間的な展開の仕方を規定する語の時間的特性を持つだけでなく、「行く」の直示性を捉えるために導入した距離関数 (DIS) や視点関数 (POV) に類似した動詞の表すイベントの捉え方に関する何らかの要素を持つために、同形式の V<sub>2</sub> として生起可能ではないかと考える。この点に関し、本稿では (5) と (6) で示したような生起制限の事実を指摘するにとどめ、「目的」を表す「V<sub>1</sub>にV<sub>2</sub>」の史的発達という観点からも、引き続き考察を進めたい。

最後に、「V<sub>1</sub>にV<sub>2</sub>」と「V<sub>1</sub>ためにV<sub>2</sub>」の意味解釈をめぐるのは、次のような対比も興味深い。(24a, b) は同じ「行く」という移動動詞を含む文だが、解釈に違いがある。(24a) は「目的」と「動機」という2通りに解釈でき、前者の解釈では祖母はニューヨークに

いるが、後者の場合は祖母が必ずしもニューヨークにいらなくてもよい。一方、(24b)はそのような両義性を持たず、祖母がニューヨークにいるという「目的」の解釈のみ可能である。<sup>7</sup>

- (24) a. 祖母を喜ばせるためにニューヨークへ行く。  
b. 祖母を喜ばせにニューヨークへ行く。

(西垣内 p.c.)

「 $V_1$ に $V_2$ 」と「 $V_1$ ために $V_2$ 」については、上述のような解釈の違いも含め、意味構造を記述し、形式的に説明することを今後の課題としたい。

## 5. おわりに

本研究では、日本語のVニイクという移動の目的を表す複雑述語に関して先行研究に残る(25a-c)のような課題について考察を行った。

- (25) a. Vと移動動詞を繋ぐ「に」の統語範疇と意味合成プロセスにおける機能  
b. Vに係る選択制限(なぜ、動作・行為動詞以外の動詞がVとして生起しにくいのか)  
c. Vニイクのような「目的」を表す「 $V_1$ に $V_2$ 」の $V_2$ に係る生起制限(なぜ、「行く」「来る」等の移動を表す動詞のみが $V_2$ として生起するのか)

(= (2a-c))

Vニイクに生起する「に」の統語範疇に関して、本研究ではそれが補文標識であると論じた。意図的な動作や行為を表す動詞のみが同形式のVとして生起するというVに係る選択制限については、「に」の意味構造内のCONST値として、同形式に生起する「に」がACTやACT-ONという語彙概念構造を持つ動詞をそのTP補部内に要求するような指定を設けることで説明可能であると分析した。第3点については、移動動詞が意味構造内のFORMAL値として、語の時間的特性に加え、その動詞の表すイベントの捉え方に関する何らかの意味論的要素を持つからではないかと述べた。

今後は、第3の課題についてVニイクの史的発達の観点も含めて考察を深めるとともに、「 $V_1$ に $V_2$ 」と「 $V_1$ ために $V_2$ 」の解釈上の対比についても、分析を進めたい。

## 参考文献

Arai, Fumihito (2014). *A Formal and Corpus-based Analysis of Grammaticalization of ik 'go' in Japanese*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.

新井文人・日高敏夫 (2013). Vユクの統語構造と意味構造. 関西言語学会第38回大会口頭発表 (2013年6月8日-9日, 同志社大学, 京都) .

<sup>7</sup>西垣内泰介氏の指摘による。

- Bybee, Joan, Pagliuca, William, & Perkins, Revere D. (1991). Back to the Future. In Traugott, Elizabeth Closs. & Heine, Bernd (Eds.), *Approaches to Grammaticalization*, Vol. 2, pp. 17–58. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 郡司隆男 (2004). 日本語のアスペクトと反実仮想. *TALKS: Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin*, 7, 21–34.
- Hidaka, Toshio (2012). *Word Formation of Japanese V-V Compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- Igarashi, Y. & Gunji, Takao (1998). The temporal system in Japanese. In Gunji, Takao & Hashida, Koichi (Eds.), *Topics in Constraint-Based Grammar of Japanese*, pp. 81–97. Dordrecht: Kluwer.
- Iida, Masayo (1987). Case assignment by nominals in Japanese. In Iida, M., Wechsler, S., & Zec, D. (Eds.), *Working Papers in Grammatical Theory and Discourse Structure: Interactions of Morphology, Syntax, and Discourse*, pp. 93–138. Stanford, CA: CSLI Publication.
- 影山太郎 (1993). 『文法と語形成』. 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (2005). 辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて. 『レキシコンフォーラム 1』, pp. 66–101. 東京：ひつじ書房.
- 小林英樹 (2004). 『現代日本語の漢語動名詞の研究』. 東京：ひつじ書房.
- 久野暲 (1978). 『談話の文法』. 東京：大修館書店.
- Kuno, Susumu (1987). *Functional Syntax: Anaphora, Discourse, and Empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kuno, Susumu & Kaburaki, Etsuko (1977). Empathy and syntax. *Linguistic Inquiry*, 8, 627–672.
- Manning, Christopher (1993). Analyzing the Verbal Noun: Internal and External Constraints. In Choi, Soonja (Ed.), *Japanese/Korean Linguistics 3*, pp. 236–253. Stanford, CA: CSLI Publication.
- Matsumoto, Yo (1996). *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- 松本曜 (1997). 空間移動の言語表現とその拡張. 田中茂範・松本曜 (編), 『空間と移動の表現』. 東京：研究社.

- Miyagawa, Shigeru (1987). Restructuring in Japanese. In Imai, Takashi & Saito, Mamoru (Eds.), *Issues in Japanese Linguistics*, pp. 273–300. Dordrecht: Foris.
- 宮島達夫 (1984). 日本語とヨーロッパ言語の移動動詞. 国語学会 (編), 『金田一春彦博士古希記念論文集』, pp. 456–485. 東京: 三省堂.
- 森田良行 (1968). 「行く・来る」の用法. 『国語学』, **75**, 75–87.
- 森田良行 (1994). 『動詞の意味論的研究』. 東京: 明治書院.
- Nakatani, Kentaro (2013). *Predicate Concatenation: A Study of the V-te-V Predicate in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Nishigauchi, Taisuke (2014). Reflexive binding: awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics*, **23** (2), 157–206.
- Pustejovsky, James (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 莊司育子 (1997). 日本語の補文構造に関する一考察: 『V に行く』構文について. 『日本語・日本文化』, **23**, 39–53.
- 莊司育子 (2012). 助詞『に』の統語的性質について: 補文化辞の観点から. 『日本語・日本文化』, **38**, 81–99.
- Stowell, Tim (1982). The Tense of Infinitives. *Linguistic Inquiry*, **13** (3), 561–570.
- Sugimura, Mina (2010). Lexical vs. functional predicates in Japanese and their agreement domains. In *Proceedings of the 2010 annual conference of the Canadian Linguistic Association*, pp. 1–15.
- Talmy, Leonard (1985). Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms. In Shopen (Ed.), *Language Typology and Syntactic Discription 3*, pp. 57–149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tsujimura, Natsuko (1992). Licensing Nominal Clauses: The Case of Deverbal Nominals in Japanese. *Natural Language & Linguistic Theory*, **10** (3), 477–522.
- 吉永尚 (2010). 助動詞『ず』の統語論的考察. 『園田学園女子大学論文集』, **44**, 1–12.

(受付日: 2016 年 1 月 10 日)